原発巣の特定に難渋した PSA 低値前立腺癌孤立性小脳転移の１例

◎寺井 貴志[1)]、寺島 睦[1)]、梅原 瑶子[1)]、松田 愛子[1)]、山岸 豊[1)]
独立行政法人 国立病院機構 金沢医療センター[1)]

【はじめに】前立腺癌は近年増加傾向にあり、Prostate specific antigen(PSA)のスクリーニング検査にて発見されることが多い。通常は緩徐進行性であるが、時に骨やリンパ節といった遠隔臓器にも転移がみられる。今回我々は PSA が低値であったにも関わらず、小脳に孤立性転移をきたし、原発巣の特定に難渋した 1 例を経験したので報告する。【症例】60 歳代男性。陳旧性心筋梗塞で経過観察中であったが、X 年 5 月、肉眼的血尿、会陰部違和感が出現し、精査加療目的に紹介された。造影 CT で前立腺左葉辺縁部に高吸収域があり、左葉に低エコー域を認めた。触診で同部に硬結を触れた。7 月、PSA 値は 2.33ng/ml であったが、針生検を施行し、10 本中 3 本(左葉)に腺癌(Gleason score 4+4=8)を認めた。密封小線源治療と外部照射治療中に頭痛と嘔気を認め、頭部 CT を施行した。右小脳に脳浮腫を伴う 2cm 大の転移性腫瘍を指摘され、同月に摘出術が行われた。全身検索にて他臓器に腫瘍性病変は認められなかった。【細胞所見】術中迅速時の捺印細胞診では、クロマチン増量、明瞭な核小体を有する大型核と、比較的広い好酸性から淡明な胞体を有する異型細胞が、主に充実性に配列し、腺様の構造も伴っていた。【組織所見】核形不整、大小不同を示す核と好酸性の広い胞体を有する異型細胞が、充実性から癒合腺管状の配列を示しながら増殖していた。免疫染色では AE1/3(+)、CK7(+)、CK20(-)、CDX2(+)、PSA(-)、TTF-1(-)、GATA3(-)、Calretinin(-)、AR(+)、P504S(+)で、最終的に PSA 低値の前立腺癌小脳転移と診断した。【結語】前立腺癌は、骨や肺などに転移がなくても、ごくまれに孤立性脳転移をきたすことがある。PSA は前立腺癌において有用な腫瘍マーカーであるが、時として低値となり病勢を反映しない場合がある。Gleason score が高い症例、核異型が目立つ症例を見た場合は、PSA が低値であっても、前立腺癌の可能性を考慮する必要がある。